

## 「心経」における母娘関係

顧 蕾

### 1. はじめに

張愛玲（1920-1995）は中国近代文学史における著名な女性作家である。彼女は日常生活と世俗の欲望の角度から、近代都市に生活する女性の苦しみに注目し、女性の運命を語っている。「心経」<sup>1</sup>は張愛玲初期の短編小説である。今まで多くの研究者はこの作品を、娘が父親に抱くエレクトラ・コンプレックス<sup>2</sup>を描写するものだと考え、娘の心理分析に重点を置いている<sup>3</sup>。果たして「心経」はエレクトラ・コンプレックスだけを扱う作品だろうか。万燕は「心経」という題目に注目し、違う視点を提供した。彼女は「小説の基調はフロイト式で、張愛玲がよく使っている情欲と非理性を人の動機を解釈する方法とする。しかし一般の評論家が考えている エレクトラ・コンプレックス 以外に、『心経』という題目が小説に与えた根本的な意味は見逃すべきではない」<sup>4</sup>と論じる。『心経』というのとはもともと「空」を論じ、現実世界での苦しみを乗り越える方法を教える佛教経典の名前である。張愛玲が自分の作品に同じ名前をつけたのはこの経典から影響を受けたからと考えられる<sup>5</sup>。しかし、万燕は「心経」の母親許夫人の欲望に触れずに、彼女の理性だけを賛美し、彼女が張愛玲の作品の中でもっともよい人間性を持っていると論じている。仏教教典の『心経』が彼岸に渡ることを救いとするのと同じく、張愛玲の「心経」は母親の理性を現実世界での救いとしている、と万燕は考えている。この考えは母親の欲望を完全に無視しているといえよう。

また、林幸謙<sup>6</sup>は張愛玲が男性家長あるいは男性人物を描写する方法には以下の二種類があると指摘している。一つは父親のないテキスト、即ち男性家長をテキストから排除することによって女性家長に家を支配させるテキスト、もう一つは男性に対する「去勢」描写である<sup>7</sup>。林幸謙はこの二つの描写方法が張愛玲の反父権意識を表わすという考えを示している。しかし林

幸謙の分類方法によると、「心経」の父親はどちらの種類にも帰することができない。この作品には父親が存在するばかりではなく、疑う余地のない強者である。このような家の母娘関係はいかなるものか、張愛玲はこの作品を通じて何を表わしたかったのか。本論はこれらの点について考えたいと思う。

## 2. 「心経」の人物の設定と粗筋

「心経」の主要登場人物は父親許峰儀、母親許夫人、娘小寒、小寒を好きになった宏海立、小寒の親友段綾卿である。許峰儀の職業については明らかになっていないが、住んでいるマンションの環境から見て、また小寒が大使や病院院長といった当時の中上流社会の実力者の子供を友人にし、彼らの前で父親を自慢するという点から見ると、許峰儀も実力者であるに違いない。小寒は大学生であり、許夫人は主婦である。段綾卿は小寒と顔が似ていて、未亡人である母親と兄嫁と共に生活している。宏海立は大学を卒業したばかりで小寒のことが好きなのに相手にされないの、彼女と似ている段綾卿に求愛している。

物語は小寒が二十歳の誕生日を迎える日から始まる。小寒は「剋母」<sup>8</sup>という予言を背負って生まれた。彼女は十二、三歳の時から父親許峰儀の愛情を独占しようとし、母親を疎遠にする。許峰儀も小寒に惹きつけられるが、小寒が二十歳となる時点で娘の肉体に対して自分の欲望を感じ、近親相姦に落ちる危機感を抱くようになる。それで、彼は娘と顔の似ている段綾卿を愛人とし、娘から去る。段綾卿も許峰儀のために、小寒に紹介された宏海立を捨てる。小寒はそれを阻止しようと努力するが、結局失敗して父親を失う。最後に、母親許夫人の意志で彼女は家から追放されてしまう。

## 3. 母親と娘の関係

「心経」は娘である小寒の行動軌跡に沿って、彼女の心理、即ち父親への欲望、求める男性像の幻滅などを語る作品である。物語の始めから小寒の言葉によって権威を示される父親と違い、母親許夫人は作品の前半ではほとんど沈黙している。娘の言葉の中でさえその存在が消されている。一方、父親と娘の近親相姦に傾く関係に関して、許夫人はその異常さを察しながら許峰儀が手を引くまで干渉しなかった。明らかに、「心経」における母娘関係は張愛玲のほかの作品に見られるような金銭関係で断裂する母娘関係とは違

う。平路は、小寒の家が豊かで、許夫人と小寒の関係は金銭に左右されないという理由で二人の間には母と娘との善意が多く存在すると論じ、「心経」は張愛玲の作品において例外だと考える<sup>9</sup>。しかし強い父親に支配されているこの家では、母娘の間に緊密な関係が結ばれていない。彼女達は一心同体になれないのである。

### 3.1 父親の黙認を得た娘の「母親殺し」

小寒は父親のいないところでは絶対的な支配力を持っている。宏海立が彼女の歡心を得られず段綾卿と付き合うのも、彼女の勧めを聞き入れた結果である。自分を追い求める男性たちに対して小寒は無情で意のままに彼らを弄ぶ。誰一人として彼女の愛情を得られない。万燕は「神話の中の子供の顔」(p. 67)を持つ小寒を神話の中の人物だと考える<sup>10</sup>。これは小寒が幻想の世界に落ち、現実世界から目を逸らしていることを指している。彼女は自分の父親を理想的な男性として愛し、彼のために母親とライバルとなる。張愛玲は、「剋母」という運命を小寒に背負わせている。即ち、小寒は生まれた時から母親と対立する立場に置かれる。これは張愛玲の母娘関係に抱く絶望感を表わしている。母娘の一心同体の親密関係は小寒が生まれる時から既に実現する可能性を失っていた。当時、そのような運命を避けるため小寒を養女に出す案があったが、許夫人はわが子を愛しんで反対した。結局小寒は本当に母親を脅かす存在となる。

小寒の母親への無視と父親への崇拜は作品の始めから明らかになる。小寒の「心経」における最初の言葉は父親の記憶力を賛美することである<sup>11</sup>。その後の会話もほとんど許峰儀をめぐる展開する。母親について小寒は一言も触れない。「お父さんとお母さんはきっとずいぶん若い時に結婚したんでしょう」と質問された小寒は空を見て頷き、言葉で答えることを拒否する。彼女が無視しようとするのは、愛する男が自分の母親と夫婦だということばかりではなく、母親との血縁関係も含めている。彼女の母親への完全な無視は友人たちにも異常だと感じられる。小寒がその場を離れる間に友人たちは以下のような会話をする。

彼女を見送ると、一人が小声で尋ねた。「彼女は口を開けば、お父さんのことばかりね。お母さんは？まだ生きていらっしゃるの？」

別の一人が答えた、「生きていらっしゃるよ。」

前の人材また聞いた、「彼女の本当のお母さんなの？」

「本当のお母さんよ。」(p. 68)

小寒の友人たちの中で許夫人を見た人はただ一人である。死んだとさえ思われている母親は、「母親」という空白を埋める存在に過ぎない。小寒は父親を崇拜すればするほど、母親の存在が邪魔になる。確かに小寒の心理はエレクトラ・コンプレックスだと言える。彼女の父親に抱く愛情は度を越え、排他的なものである。しかし父親の黙認、さらに支持がなければ、小寒は決して母親の存在を抹殺することに成功できない。前にも触れたように、許峰儀は張愛玲の作品の中で数少ない強力な男性である。彼は健康な身体を持ち、社会的地位があり、経済力もある。即ち、彼は作者のほかの作品に溢れる「去勢」された男性と違い、父権の権威の立派な代表者である。家において許峰儀は強力な家長となり、家族全員を支配する。娘から見ると、このような父親は完璧な存在である。許峰儀は娘が抱く愛情の異常さを知って、それを阻止するのではなく、娘に惹きつけられ、娘の「母親殺し」に積極的に参与する。彼が使った手段は「母親」という空間 妻に属する領域への侵入である。

小寒の家の応接間には三枚の写眞が飾られている。本来一家全員の写眞を飾るべきところには小寒の一枚と父親の二枚しかない。母親の写眞は消えた。ここに注意すべきことは、母親の代わりに許峰儀の女装した写眞が飾られていることである。このように母親に属する領域が女に扮した父親に奪われる。李貴雄は、この家での「母親」は「彼女〔小寒〕の父親が扮装したもの」にすぎないと論じている<sup>12</sup>。仕事を持たずに、家を唯一の居場所だと考える許夫人は、自分の家にすら安住できない。これも家に対する父親の究極的な支配と母親の感じる息苦しさを表している。

父権制度は女性に対してだけでなく、制度を維持するために男性の行為をも制約している。近親姦タブーはどの文化にも共通するものである<sup>13</sup>。許峰儀は家長としての権威を維持するために娘と性的関係を結ぶこと、即ち近親相姦を行うことはできない。小寒が二十歳になるにつれ、二人ともその危機を感じることになる。しかし二人は違う方法でその危機に直面する。小寒は神話の世界に止まり、現実を認めようとしない。小寒は母親の代わりにな

ることを望んでいるのではなく、彼女の目的はただ「子供のまま」で父親を独り占めにし、母親を排除することである。大人になれば父親と娘の関係は男と女の関係に発展して行き、プラトニックラブが維持できなくなる。それが許されないことだと小寒ははっきりと分かっているので、子供から女への成長を拒否しようとする。小寒の理想は性的関係を伴わないものである。一方、娘への父親の視線は既に情欲を帯びている。許峰儀が娘から離れる原因は、娘の肉体に対して自分の欲望を感じ、その欲望を満たすと自分の築いた権威は破滅してしまうと分かっているからである。

ガラス越しに、峰儀の手が小寒の腕に重なった 象牙色のふっくらとした腕、服は美しい更紗で、赤い漆のような地に唐子模様があり、無数の唐子が彼の指の間で動いている。小寒 あの可愛くて大きな子供、ふくよかで象牙色の肉体を持っている大きな子供……峰儀はまるで火傷でもしたように激しく自分の手を引っ込めて、顔色も変わった。体の向きを変え、彼女を見ないことにした。(P. 82-83)

許峰儀は娘の将来を心配するというより、自分のことを心配している。彼は小寒に以下のようなことを言う。

「およそ人の心があれば、私が楽しくなれるものか。君が自分の人生を棒に振るのを見ているのだ。君が自分を犠牲にして、私にはどういう良い所があるというのだ」(p. 82)

許峰儀は娘に欲望を抱き始めるが、娘の肉体を放棄せざるを得ないため、娘と同じ年齢の段綾卿の肉体を手に入れる。即ち、彼は他の女の肉体を通じて、禁止された娘の肉体を象徴的に手に入れる。初めて段綾卿と小寒が似ていることを発見したのはほかでもなく、許峰儀である。段綾卿は新しい恋人ではなく、小寒の身代わりにすぎない。許峰儀はこの方法で近親相姦の危機を回避し、家長の威信を維持する。

小寒一人の力では母親を暗闇に閉じ込めることができない。許夫人を絶望させたのは、娘ではなく夫である。許峰儀は成功を収めた男性という完璧さを持つことから、輝かしい存在となる。父親が放つ光はあまりにも強烈で、居間から寝室から、母親の空間をほぼ完全に奪ってしまう。父親の光を求める娘は無力な母親を軽蔑、憎悪する。小寒は自分が嫌悪する母親の血を受け継いだことを否定できないからこそ、母親と精神的な絆を結ぶことを拒絶す

る。その意味で彼女は父親の娘で、母親の娘ではない。

(前略)彼女の太ももはぴったりと母親の太ももに押しつけられていた自分の骨肉！彼女は突然強烈な嫌悪と恐怖を感じた。誰が怖い？誰を憎むの？母親？自分？彼女たちは同じ男を好きになった二人の女にすぎなかった。彼女は自分の肉とぴったりとくっついている彼女の温かな、他人の肉を嫌悪した。ああ、自分の母親！(p. 94)

小寒が許夫人を憎む唯一の理由は、同じ男性を愛していることである。小寒の愛が絶望的なものになったのは、父親を愛したからだけではなく、父親に裏切られ、「母親殺し」の罪を自分に背負わせたからである。即ち、娘のかつて強く信じていた父親の完璧さは崩れた。小寒と父親の関係によって傷つけられたのは父親ではなく、小寒と母親だけである。許峰儀は他の女によって娘への欲望を満たせるが、許夫人は女としての感情を封殺され、母娘の間の愛情にも永遠に消せない傷が残される。男性の愛を奪い合う戦いの中では、女性たちの絆が存在しない。たとえ母娘であっても例外にはなれない。勝利を収めるのは父親だけとなる。

身を引くことを決心した許峰儀は家長の立場から全ての責任を娘に帰し、小寒を「誘惑する娘」と定義した。それによって、彼は「誘惑された父親」となり、「母親殺し」の罪を娘独りに背負わせる。母親の不幸は娘から由来するかのように見える。

峰儀は低い声で言った。「君がお母さんの近くにいて、お母さんと競い相手が劣ることを見せつけなかったら、あんなに早く老けることもなかった。」(p. 83)

小寒は父親の責任逃れを以下のように指摘している。

小寒が言った、「お父さんの口ぶりでは、まるで私のわなに落ちたことを怨んでいるみたい。まるで私がわざとお母さんを苦しめ、両親の愛を裂いたようだわ。」(p. 83)

「お父さんがお母さんを愛しているのなら、私がここにいても同じく愛してるわ。お母さんを愛していないなら、たとえ私をシベリアに追放したってやはり愛せないわ。」(p. 82)

父親の完璧さは幻となる。一方、小寒の無力は彼女の自己欺瞞と最後の失

敗によって明白に示されている。家の支配者である父親の権威と母親の精神的な不在は強烈な対比となっているので、小寒は父親を過大評価し、母親を低く見ている。支配者への崇拜は小寒の「愛」、競争心と排他的な意識を引き起こす。父親が強力になればなるほど、娘は妻の座につく母親に深く嫉妬する。

許夫人は家に閉じ込められながら、家の中に自分の居場所を見出せない。妻と母親という二重の身分を持ちながら、夫と娘に空虚なものとされ、飾りとしての「妻」と「母親」にすぎない。小寒は母親を捨て、父親を選び、彼の支持を得て「母親殺し」をする。この選択は母親への拒絶であり、母親だけでなく自分まで深く傷つける結果をもたらす。

### 3.2 母親の沈黙

小寒の家は「完璧」だと周りに賛美されている。この完璧さは「母親殺し」の真実を隠している。許夫人は年をとるにつれ、娘に夫の愛を奪われ、暗闇に身を隠すようになる。このような母親は完全に家の背景に吸収され、張愛玲のほかの作品によく現われる母親像と同じく、「屏風の上に刺繍されている鳥」<sup>14</sup>となり、飛び立つことはできない。彼女は娘を持っているが、娘を生んだ瞬間から剋される運命だと言い渡される。その予言は母娘の宿命的な断絶を宣言した。彼女は愛する夫を持っているが、その人の愛を失ってしまう。夫の裏切りに対して彼女はまったく無力である。娘にとっても夫にとっても、許夫人はただの「母親」という家の所属品に過ぎない。家の中で彼女は自分の言葉も出せず、その存在自体さえほかの家族の意志によってほぼ不可視となっている。許峰儀と小寒の異常な関係を察したにも関わらず、彼女は沈黙を保つ。その沈黙は母親が自ら行う「母親殺し」であり、父親と対抗できる存在としての母親を殺した。母親の沈黙によって、父親の支配を受け入れることが娘の唯一の道となる。

許夫人は夫を絶対的な支配者だと認識している。すなわち、彼女は夫と自分の上下関係を承認し、初めから抵抗することを諦めた。許峰儀は彼女に一生の保障（婚姻関係による社会的地位などの獲得）を与える代わりに、彼女の主体性を奪い、精神的に彼女を奴隷化してしまう。許夫人は確かに娘に愛情を持っている。「剋母」という運命だと知りながら、娘を養女に出すことを拒絶したのは、娘への愛情表現である。しかし彼女はそれ以上のことはで

きない。許夫人は自分の意志を自分の言葉で娘に伝えることを長い間放棄してきた。母親の沈黙は一つの空白を作り、その空白は父親に占有される。娘は父親が支配し、母親が従うということを学び、無力な母親を軽蔑の対象とし、強い父親を崇拜する。母親は沈黙を破らない限り、娘が父親の支配を唯一の真理とすることを阻止できない。許夫人の沈黙は夫への絶対的な服従、娘との絆の放棄を表す。この精神的に不在である母親は張愛玲の作品によく現われる母親像である。特に父親が支配する家の母親、例えば「花凋」(1944)の鄭夫人、「瑠璃瓦」(1943)の姚夫人などはその代表である。この点から見ると、経済状況、階級などの家庭背景がそれぞれ違うにせよ、母親たちの無力は共通している。母親を「不在」にした根本的な原因は父権による支配にある。母親の「不在」によって「完璧な」家は成り立ち、家には父親の声だけが響いている。

許峰儀と娘小寒の関係は近親姦というタブーを破っていない。父親は父権制が許容する限界を超えない限り、その支配力を失うことはない。たとえ父親がタブーを破ったとしても、母親は相変わらず父親に反抗できない。父親が権力を失う時、その家は壊れてしまう。既に家の背景の一部となった母親も逃れる道がない。夫に頼って生存する母親は、自分の為に娘を犠牲にするしかない。

許夫人は決してその家に安住しているわけではない。長い結婚生活は彼女にとって屈辱の連続である。小寒は許峰儀が段綾卿を愛人にしたと知った時、母親への荒々しい父親の態度を批判し、母親の力を借りようとする。許夫人の答えは次のようである。

許夫人は溜息をついた。「あれぐらいなんでもないわ。これより耐えがたいことを、私は長年の間ずっと我慢してきたわ。」(p. 86)

許夫人は全てを耐えてきた。

「お父さんは野放図なことがなかったけど、.....それぞれの家にはそれぞれの難しさがあるわ。あなたたちのような今風の気性で、お父さんに対して譲らなかつたら、この家はとっくの前になくなってるわ。」(p. 86)

許夫人は自分の我慢には価値があり、自分にも娘にも必要なものだとして強く信じている。彼女は夫と娘との曖昧な関係をも我慢する。許夫人は全てを知

っているが、家の「完璧さ」を維持するために知らないふりをする。許峰儀が段綾卿と同居し始めたことで、父親と娘の異常な関係は水面に浮上し、母親の長年被ってきた仮面はついに崩れる。

小寒は気を取り直すと、歯ぎしりしながら言った、「いい気なものね！よくもあの二人を放っておいたものだわ。お父さんが段綾卿と同棲してしまったこと知ってるの？」

「私が知ってるか知らないか、あなたと関係あるの？私がかまわないのに、あなたがかまっていいというの？」(p. 90)

許夫人はここで妻としての優位性を示している。これは娘に対してではなく、同じく敗北者であるライバルに見せる態度である。彼女が夫の行動を放任するのは、自分の妻としての立場が脅かされていないと確信しているからである。しかし娘の場合は違う。小寒の愛は全く保障されていないので、許峰儀の愛情が移ると、小寒には彼を止める術がないし、止める行為自体が許されていない。許峰儀の愛情を失った小寒に対して、許夫人は母親としてではなく、妻として警告し始める。母娘のこの会話も父親が離れることを前提として可能になる。娘に対する許峰儀の放棄によって家の危機が解除された。段綾卿はあくまでも愛人であり、許夫人の地位を脅かすこともなく、家の「完璧さ」を壊すこともできない。許夫人は夫に対して沈黙し続ける。許峰儀は仕事で天津に行く名目で家を出る時、許夫人は自ら彼の荷物を整え、薬の飲み方を注意し、完璧な妻の役割を演じる。

小寒は父親を止めるために段綾卿の家に行き、彼女の母親に告発することを思いつく。小寒を阻止したのは許夫人である。許夫人にとって夫の不倫は脅威ではないが、娘の父親に対する執着心は家の「完璧さ」を打ち壊すものである。許峰儀が小寒から去り、段綾卿を選んだことは家の安定を保証した。許夫人は娘の執着を許すわけがない。もちろん娘を阻止することは娘のためにもなるが、許夫人の行為は家、そして自分を守ることを最も重要な目的としている。

しかし同じく捨てられることは、母親と娘がお互いを理解するきっかけとなる。父親が離れた家で、娘は初めて母親に呼びかけ、母娘の絆が断絶したことによってもたらされた苦痛を訴える。

彼女は苦痛の声をあげた。「お母さん、私をずっと前からかまおうとし

なかったわ。一体何をしてたの？」(p. 94)

許夫人も娘に向かって自分の心境を語る。

「私はずっと知らなかったわ。……薄々感じたけど、信じることを恐れ  
てきた。 今日、あなたが私に信じるようにとせめたてるまで。」  
(p. 94)

許夫人は娘がどのように自分と夫との愛情を壊したかを顧みて、娘の罪悪感を引き起こす。「完璧」だった家は父親が消え、母娘だけの世界となるが、許夫人は許峰儀を恨んではない。彼女はかえって夫が自由に愛を求めることに対して理解を示し、自分の苦しみを抑える。

「私？私はずっと取るに足りない人間だったわ。今となっても同じよ。  
(後略)」(p. 94)

許夫人はあくまでも自分の主体性を否定し続け、我慢と自己犠牲を自分に押し付ける。言い換えると、彼女は自分と夫との対等性を完全に否定している。父親の権力の重圧を背負う母親と娘は、お互いの立場と苦痛を少し理解したとしても同盟を結べない。父親の支配を転覆させない限り、母娘は対立する立場から解放されない。母親は娘の精神的な支えになれないし、娘は無力な母親を尊敬できない。

許夫人は結局小寒を家から追い出すことにした。娘を追い出さないと、家の「完璧さ」への脅威は消えない。母親のこの決意は父親が娘を放棄したことを前提条件とするので、父親の意志をも表わしている。母親はただ父親の法を執行したに過ぎない。男性家長への無条件な崇拝が肯定され称揚されるために、母と娘の絆は切れる運命にある。「剋母」という予言は父親の絶対的な権力と母娘関係への介入を前提に実現される。

#### 4. 終わりに

「心経」は「完璧」な家を作り、その「完璧さ」の背後における異常を描き出す。父親を愛してしまう娘、娘を愛してしまう父親、そして沈黙を保つ母親。この三人で成り立つ家はその表面での「完璧」、「幸せ」によって皆に羨まれる。しかし、娘の欲望は、父親と母親の欲望と絡み合い、その幻滅する過程は家の奥に隠れている真相を暴露した。最後に、娘がほかの男性へ

愛情を転移するのではなく、父親が娘と似ている女性と不倫に落ち、娘に抱く情欲を満たすことによって近親相姦の危機を乗り越える。さらに、脅威となった娘が追放されることによって、家の「完璧さ」は維持される。しかし娘と愛人との肉体の類似性は父親の娘への執着心とこの解決方法の虚偽性を示している。父親が欲望を抱く対象はやはり娘である。父親の究極な支配を受けているからこそ、娘はエレクトラ・コンプレックスを乗り越えられず、人生を台無しにする。張愛玲はこの作品を借りて、母娘の敵対関係が父親の絶対的な支配に由来することを暴露した。同時に母娘関係の修復に対して、張愛玲は悲観的な考えを示す。生まれる時点から既に決められた運命は変えることができない。娘は父親の愛を得る（実は父親の欲望を満たす）ために自分の人生を犠牲にしたが、幻滅する運命を辿る。父親をめぐる母娘の間の憎しみ、戦いと二人の深い傷、その根底にある幻滅は、『心経』という仏教経典が訴えることに共通している。しかし本来『心経』とは欲を捨て、彼岸に渡ることを解決法とするが、張愛玲の「心経」は欲望を描きながら、彼岸への道を封じている。父親の支配を受ける限り、娘による「母親殺し」は続き、母親の沈黙は打ち破ることもできない。母親と娘はお互いの苦痛を知りながら、助け合うことを拒絶するので、父親に対抗できず、救いを与えることもできず、得ることもできない。

## 注

- 1 初出は1943年8月『万象』月刊、本稿で使うテキストは『張愛玲文集』第一巻（安徽文芸出版社1991年）所収のものによった。既訳に丸尾常喜訳「心経」（白水紀子主編『女性作家選集』二玄社2001年所収）がある。本稿の引用は既訳を参考にした拙訳である。
- 2 ギリシア神話の中のミケーナの王アガメムノンの娘エレクトラから出ている。この娘の持つ父親への愛と母親への憎しみから、男性の場合とちょうど反対の女性の対称的なコンプレックスを「エレクトラ・コンプレックス」とユングは命名した。『エディプス・コンプレックス論争 性をめぐる精神分析史』（妙木浩之著 講談社2002年）p. 83を参照。
- 3 例えば、宋家広は「張愛玲的『失落者』心態及創作」（『文芸評論』1988年第1期）の中で、「心経」がフロイト理論の色彩に満たされていて、性愛の悲劇だと論じている。
- 4 万燕1996『海上花開又花落 読解張愛玲』百花洲文芸出版社 p. 66
- 5 本稿は釈濟群（濟群法師）の『「心経」的人生智慧』（1995年）（<http://book.bfn.org/books/0266.htm>）における『心経』の経文を底本とし、ま

たその解釈を参考。

- 6 林幸謙 1998「反父権体制的祭典 張愛玲小説論」金宏達主編『回望張愛玲・鏡像昇紛』文化芸術出版社 2003年 p. 171
- 7 ここの「去勢」描写とは男性の身体上あるいは精神上的の病弱を強調することによって父権の権威を抹殺する描写方法を指す。
- 8 「剋母」: 中国の占いによると、子供は生まれる日時などによって母親に災難をもたらすと言われている。
- 9 平路 1999「傷逝的周期 張愛玲作品與經驗的母女關係」楊澤『閱讀張愛玲 張愛玲国際研究会論文集』麦田出版社
- 10 万燕 1996『海上花開又花落 読解張愛玲』百花洲文芸出版社 p. 124
- 11 許小寒が言った、「綾卿、私の父はあなたに会ったことがないわ、けれどあなたの電話番号を覚えていますよ」 p. 67
- 12 李貴雄 1988「臨水自照的水仙 从『心経』和『茉莉香片』看張愛玲小説中人物的自我疏離特質」金宏達主編『回望張愛玲・鏡像昇紛』文化芸術出版社 2003年 p. 215
- 13 シュディス・L・ハーマン 2000『父 娘：近親姦：「家族」の闇を照らす』斎藤学訳 誠信書房 p. 59
- 14 張愛玲 1943「茉莉香片」『張愛玲文集』第一卷 安徽文芸出版社 1991年 p. 54